

# 福島県浜通りを 次世代型モータースポーツと 混合燃料のメッカに

放送大学1年 井上智尋

# 私が考える福島の未来

私は福島のこれからを

「東日本大震災で大打撃を受けた県」という**暗い印象**から、

「次世代型モータースポーツ施設で有名な県」という**明るい印象**に変えたい。

理由としては実際私は震災が発生して以来、福島県に何回か訪れたことがある。足を運んでみて思うこととしては、震災の影響は未だに続いており、どちらかというとも明るさよりは**暗さ**を感じてしまった。

もちろん、新しく福島県に居住する方々が頑張っている姿や、地元住民の方々が集まるお祭りの楽しい印象もあったが、やっぱり暗い記憶の方が印象に残ってしまう。

それを踏まえて福島県に**明るすぎるくらい**の**新しい印象**を作り、観光客の方にも楽しい記憶を持って帰ってもらい、それをまた別の誰かに**広めていける姿**を目指していくことが必要だと考える。

色々考えたが、自分が学生時代を通して取り組んだ**モータースポーツ**であれば、その印象を明るいものに変えられると考えて提案させていただいた。



# 私の自己紹介・福島と私の関わり

## ①大学(現在は該当大学は卒業済)で自動車部に所属(画像上)

実際にサーキットにて実施される大会に参加したり、自動車メディアの学生ライターとして記事を執筆したことをきっかけに、モータースポーツ・自動車産業には根強いファンがいることを痛感した。

また自動車競技も二酸化炭素排出を防ぐために競技でEV部門を導入することなど、数多くの取組を行っていることも学んだ。

私個人は車を所有していなかったことから、練習会場(サーキット)までの移動手段に課題感を持つようになる。



## ②「福島、その先の環境へ。」ツアー企画

2023年に「環境再生・街づくり」をテーマに大学生に向けてツアー内容を考案。3月10日の「福島、その先の環境へ」シンポジウムにも参加し、福島の未来に対して発表させていただいた。(画像中央)

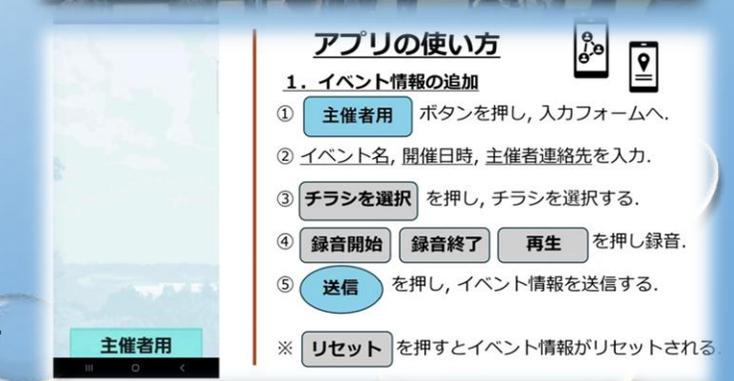
そこから福島を復興させるために福島県内・外から頑張っている方々がたくさんいることや、実際の浜通りの町の風景を見て、有効活用できそうな広大な土地があることを学んだ。



## ③おおくまワガママLABにて大熊町民の課題を解消するアプリを開発(画像下)

「〇～多くの大熊町民と繋がる輪～」というアプリを3人チームで開発。

大熊町に実際に暮らしている方にインタビューを行い、高齢者の方に対して移動手段・情報の伝達を効率的に伝達できるアプリを開発。大熊町のローカルイベントに老若男女問わず参加してもらうために、高齢者の方向けの送迎手配・イベントのチラシをラジオ感覚に読み上げる機能を搭載した。



# 福島県民とモータースポーツを行う人のペルソナ

モータースポーツを行っていた自分の課題・そして福島県の持つ課題は、同じ手段で解決できるのではないかと考え、福島県民と自分の抱える課題を以下にまとめた。なおここで述べる福島県民とはおおくまワガママLABの企画にて大熊町の町民の方にインタビューを行ったものである。

## 【福島県民】

- ・街頭が無くて景観的に静かすぎる(画像上)→特に若い女性は安全面に懸念を感じるため、盛り上げて欲しい
- ・かつて帰宅困難区域であった影響で住宅が多く取り壊されている→広大な場所を有効活用したい
- ・主要観光施設が多くないのに加えて、「被災地」というイメージがあるため、観光客として来る方が少ない→偏見を上書きできる偏見を作る必要がある
- ・例えば大熊町には大熊インキュベーションセンター(画像中央)もあり、福島県浜通りには新規事業を立ち上げようと奮闘する起業家の方が集っている。そんな諸企業が自社の取り組みをどこかに広くアピールしたいと考えている→取り組みをアピールするためには注目される場所にて広告を打つことが重要
- ・放射線量が一定以上超えてしまった農作物等は今でも廃棄されてしまう(画像下)→資源を無駄にしたくない

## 【来訪者】

- ・モータースポーツの練習をより安価に行いたい→走行料だけでも金銭的に高い(1日当たり5000円~1万円程度)
- ・モータースポーツ観戦を駅からアクセスの良い場所で行いたい→駅からはアクセスが悪い(富士スピードウェイは御殿場駅からタクシーで約20分でバスなどは出していない)
- ・モータースポーツ会場に車で移動する際にも、渋滞をしていない方が望ましい→渋滞の影響で到着時間が3時間以上長くなることも度々あった。富士スピードウェイ・鈴鹿サーキットに向かう際にも使用している東名高速(上り)海老名JCT~横浜町田には実際に渋滞ワースト1位を記録している。(平成27年/国土交通省より)
- ・積雪リスクの低い場所だとなお更良い→大学自動車部は2月に新人戦があり、実際に大会会場(富士スピードウェイ)が降雪により延期したケースがあった



# ペルソナの課題解決後

前のスライドにて述べた両方のペルソナが持つ課題は、モータースポーツ施設を作ることによって一気に叶えることができると考えている。

## 【大熊町民】

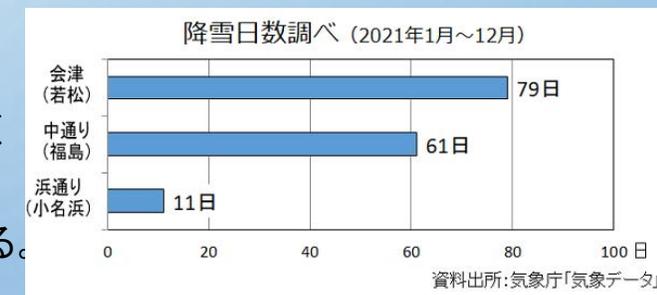
- ・住居周辺にモータースポーツ会場ができることで、利用客の方の声や会場アナウンス等で盛り上がる
- ・広大な土地をモータースポーツ施設として使うことで、その町にしかできない**新たな産業**が生まれる
- ・被災地というイメージではなく「安価でモータースポーツが楽しめる新しい場所!」として**イメージを書き換える**ことができる
- ・モータースポーツは競技の性能上、走りに関するアナウンスが行われたり、電光掲示板が使用される場所もある。そこで**広告を大きく打ち出す**ことも可能。またモータースポーツ車両には**スポンサー企業ロゴ**を入れることが多く、そこに**福島県の起業家の方々の企業ロゴ**を入れることで、**企業の認知度も高まる**
- ・せっかく作った農作物等の資源を有効活用するためにも、**混合燃料**(後述します)を活用して、**資源の無駄を防ぐ**ことができる

## 【来訪者】

- ・走行料を他のモータースポーツ会場よりも安く設定することで、**福島県を練習場所・大会会場として選択する方が多くなる**
- ・福島県浜通りは、東京駅から約3時間ほどの良アクセスであるのに加え、駅から近い場所に会場が作れる土地がある。これを通して親御さんや友人も学生向けの大会を気軽に見学できる**モチベーション**が高まる
- ・高速道路は静岡方面と比較して渋滞するリスクは低いため、安心して会場に向かうことができる
- ・福島県浜通りは降雪がほとんどない暖かい地域(気象庁/2021年)であるため、**年中モータースポーツがしやすい環境**になっている



浅野燃系公式サイトより



福島県公式サイトより

# 対象地域の選定

モータースポーツ施設を作る対象の土地は、福島県浜通りにある大野駅周辺であると考えている。

## 【大熊町民】

- ・若手起業家の方が多く、新しいことに挑戦している印象の強い地域であるため、新しい事業を始めることにポジティブな意識を持つ方が多いと予想
- ・大野駅を実際に二度利用したが、駅周辺に施設等が現状で少なく、新しい施設を立てる余地・希望があると考えたため

## 【来訪者】

- ・東京駅から電車で3時間、片道7390円(特急ひたち)で大野駅に向かうことができるという、アクセスの良さ。新幹線で向かう必要がなく、費用としても抑えることができる
- ・施設を日程を連続して使用する際にも、温浴・宿泊施設「ほっと大熊」があることで、宿泊先として使用することができる点も魅力的。また宿泊料についても一泊3850円と安価で団体向けの和室がある点も部活動・チーム単位での使用に非常に向いている
- ・大野駅の位置する、大熊町は隣に富岡町もあり、車で30分程で移動することが可能。富岡町にも宿泊施設があるため、周辺の観光場所にも施設利用の方の流入可能性がある



# プラン

大熊町にてモータースポーツ施設を作る際に以下のプランを定める。通常のモータースポーツ施設であると環境面からも懸念が出るともちろん考えているため、SDGSを叶えた次世代型サーキットを建設することを目的とする。

## ①サーキットの土台として福島県の除去土壌を優先的に使用

→除去土壌を優先的に使おうとする住民・会社が他県では現状少ないという話を2024年に実施された「福島、その先の環境へ」ツアーにて環境省の方からお話を伺った。

## ②走行料は一律1000円

→これは他サーキットと比較して非常に安価

## ③面積は9000M<sup>2</sup>程度を想定

→最初は少ない面積でジムカーナ(パイロンを設置して設営したコースを、1台ずつ走行してタイムを競うモータースポーツで大学生の競技も存在する)場を1つ作るイメージ。人気が出次第、他のモータースポーツ競技用のスペースを増築していく

## ④二酸化炭素の排出ゼロを目指すサーキット。

→本プランで立ち上げるモータースポーツ施設は2050年までにEV・混合燃料のみの使用に切り替え、二酸化炭素排出ゼロを目指す

## ⑤地元企業のロゴステッカーを車両に貼る・SNS投稿することでの特典

→これによってモータースポーツ界隈に該当企業が広まりやすくなる効果があるため、地元のモール等の施設で使用できる飲食店の商品券・お土産などを提供する

## ⑥混合燃料使用の競技の部を作る

→放射線量の影響で使用しなくなったお米等を使用した混合燃料を使用した車両のみが出場できる「混合燃料の部」という新たな部門を作り、環境面での話題としても福島を知ってもらえるきっかけを作る。



# 混合燃料に関する具体的なプラン

混合燃料の活用方法に関して詳しく説明させていただきます。

福島県はゼロカーボン使用宣言事業を行っていたりと、環境問題面にも気を使っている県であると考えます。モータースポーツはCO<sub>2</sub>を排出してしまう競技だと思われがちだが、**CO<sub>2</sub>削減のために混合燃料の活用を全力で進めるプラン**にしたいと考える。

バイオ燃料に詳しい横山伸也・東京大学名誉教授は「CO<sub>2</sub>削減の政府目標の達成には、従来車の燃費改善や次世代自動車の導入に加え、ガソリンにエタノールを10%混ぜた『E10』と呼ばれるガソリンの導入が必要」と指摘する。E10は米国で一般的に普及するガソリンだ。ガソリンはCO<sub>2</sub>排出の元凶ではあるが、エタノールを混ぜたガソリンから排出されるCO<sub>2</sub>は、もともと植物が光合成で大気から固定したものを含むので、発生したCO<sub>2</sub>はプラスマイナスでゼロ（カーボンニュートラル）となる。つまり、エタノール混合のガソリンは、エタノールの分だけCO<sub>2</sub>発生が抑えられることになる。「E10が一般的な米国では昨年、約5700万トンのCO<sub>2</sub>排出が削減された。仮に日本のガソリン全てがE10となれば、約570万トンのCO<sub>2</sub>が削減できる」と横山名誉教授。

以上の産経ニュースの資料では、エタノールとガソリンを混ぜた混合燃料を使用することで、発生したCO<sub>2</sub>を帳消し(ゼロ)にできると述べられている。

本プランでは、ガソリンに福島県の農作物の中で放射線量が強くて販売できないものをエタノールとして加工し、混合燃料として活用することで、CO<sub>2</sub>排出そして農作物の無駄をなくすことが狙いである。

混合燃料についてはまだ研究段階ではあるが、自動車会社等も研究をしている最中で、経済産業省では2040年までに実用化を目指す方針が立っている。混合燃料の実証場所としても本モータースポーツ施設の活用も視野に入れられればとも考える。

参考文献:

産経ニュース/2024年

[HTTPS://WWW.SANKEI.COM/ARTICLE/20240531-UWV5DPTWLZNGHMC26KKEOJPT4Q/](https://www.sankei.com/article/20240531-UWV5DPTWLZNGHMC26KKEOJPT4Q/)

経済産業省 資源エネルギー庁/2023年

[HTTPS://WWW.METI.GO.JP/SHINGIKAI/ENERGY\\_ENVIRONMENT/E\\_FUEL/PDF/2023\\_CHUKAN\\_TORIMATOME.PDF](https://www.meti.go.jp/shingikai/energy_environment/e_fuel/pdf/2023_chukan_torimatome.pdf)